



教皇様の叡

Libreria Editrice Vaticana, Città del Vaticanoの転載許可済 © 1992 発行所 財団法人 精道教育促進協会 〒659 兵庫県芦屋市船戸町12-6 TEL.0797-31-3452・FAX.0797-31-3448

慰めを与える

イエズスの聖心

「イエズスの聖心、全ての慰めの源、；どうぞ私たちをあわれんでください。」

1 天地の創造主である神は、また全ての慰めの源でもあります。(コロサイ二・三、ローマ十五・五) 旧約聖書は多くのページをさいて、神がご自分の民を迫害の苦しみの中で慰め、慈しまれたことを語っています。エルサレムが破壊され荒廃しつくした時、神はその地を慰めるため、預言者を遣わして「なぐさめよ、私の民をなぐさめよ…エルサレムの心に語りかけ、公に告げよ、その苦しみは終る」(イザヤ四〇・一)

「二」とお告げになりました。敵への恐怖に打ちひしがれたイスラエルの民に向かって「私はおまえを慰めるものだ」(イザヤ五一・十二)とはつきり仰せになっています。また、エルサレムに喜びと

慰め、平安を与えたいと望まれてご自分を子に対する慈愛に満ちた母にたとえて仰せになります。「エルサレムよ、喜べ。それを愛するものはみな、彼女について喜べ；こうしておまえたちは慰めの乳に満たされる。母が子を慰めるように、私はおまえたちを慰める。」(イザヤ六六・十、十一、十三)

2 真の神、真の人間、私たちがズスは、私たちの間に現存されるようになりました。事実、義人シメオンは幼いイエズスを腕に抱く喜びを得て神を賛美し、「イスラエルのなぐさめ」(ルカ二・二五)

がかなえられると告げました。キリストが生涯を通して説いた神の国の教えは慰めの奉仕でした。すなわち、貧しい者によい知らせを、捕われ人に解放を告げ、病いの人

を癒し、全ての人に救いと恩寵を与えられました。(ルカ四・十六)

「二一、イザヤ六一・一〜二) キリストの聖心から、「悲しむ人は幸いである。彼らは慰めを受けるであろう」(マテオ五・四)という慰めの至福八端があふれ出しました。さらに「労苦する人、重荷を負う人はすべて私のもとに来るがよい、私はあなたたちを休ませよう」(マテオ十一・二八)という励まし言葉も。

キリストの聖心からである慰めは、人々の苦しみを御自分のものとし、不安をなくし、悲しみを和らげ、友愛を示す確実なしるしでした。キリストはこのような慰めの言葉とわざの中で、その深い思いやりを具体的な行いとみごとにあわせておられました。ナインの町の入口近く、一人の寡婦が一人息子の亡きがらを墓に運んでいくのを、ごらんになったイエズスは、共に悲しまれた。そして「哀れに思われたい」(ルカ七・十三)のです。主は柩に手を触れ、若者に起きよと仰せになって、その母親に息子を

お渡しになりました。(ルカ七・十四〜十五)

3 イエズスの聖心は、今もなお慰めの根源です。天の父と共に祈られるキリストは、「私は父に願おう。そうすれば父はほかの弁護者をあなたたちに与え、永遠に共にいさせてくださる」(ヨハネ十四・十六、二五、十六・十二参照)と仰せになって、慰めの聖霊を送ってくださったからです。聖霊は真理と平和、調和と柔和、慰めと憩いを与えつつ、過越しと聖霊降臨の日以来、(使徒行録一・一〜十三)絶えず送られています。(ヨハネ十九・二八〜三四)

4 というわけで、キリストは全生涯にわたって、慈悲と慰めを与える使命を果してこられました。教会はキリストの聖心と、そこからあふれ出る恩寵と慰めの流れを觀想して、次のようなすばらしい祈りに表しました。

「慰めの源である慈しみ深いイエズス、どうか私たちをあわれんでください。」

これは幾世紀にもわたる迫害と試練の時代、教会がその泉からずつと希望と慰めを得てきたことを思い出させてくれる祈りです。それは真の慰め、永遠の力強い慰めをキリストの聖心に求めよという招きです。

それは神から慰めを受けている私たちが、愛と確信をもって、次は人々に慰めをもたらすべきだという訓戒です。使徒パウロは、「神はあらゆる艱難のうちにある私たちを慰めてくださる。それは、神から受ける慰めによって、私たちにも多くの艱難のうちにいる人々を慰めさせるためである」(2コリント一・四)と言っています。私たちが同じ体験をすべきだという訓戒です。

苦しむ人の慰め手聖マリアよ、憂いと悲しみの暗闇にいる私たちを、その御一人子、すべての慰めの源であるイエズスのもとに導いてください。

自由の基礎は道徳

(一月三十日、教皇様はアメリカから来た、ボルノに反対する宗教者の団体と会見された。この一団は、教皇庁家庭評議会の会合に出席するため、シカゴ大司教と共にローマに来ていた人々である。)

「ボルノに反対する宗教者連絡会議」の企画委員の皆さんをお迎えし、喜びにたえません。ユダヤ教、カトリック、ギリシャ正教、プロテスタント、モルモン教の各宗派を代表して、超宗

派の集まりを構成しておられる皆さんは、アメリカ社会の抱えるこの深刻な問題に対する憂慮を表明するための最適任者と言えましよう。家庭評議会との討議は、ボルノに反対する善意の人々全員が、今すぐ効果的に協力し合わねばならないこと、またボルノが個人、家族、そして社会生活に大変な悪影響を及ぼしていることに注意を喚起するため、大いに役立ちます。



ボルノ類の洪水は、現代社会を揺るがす広範な道徳価値の危機を示す、一つのしるしにすぎません。(広報評議会、マスコミにおけるボルノと暴力の問題についての司牧的回答、1992)

ボルノは不道徳であるばかりか、究極には反社会的なものです。それはボルノが、神の似姿として創られた(創世の書一・二六―二七参照)人間の本来の姿に反するからに他なりません。その性質から言って、ボルノは人間の性の持つ真の意味を否定します。性は神からの贈り物であり、人を愛に導き、責任ある出産という行為を通して神の創造のみわざにあずからせることを目指しているからです。身体を感覚の喜びの道具にまでおとしめることによって、ボルノは真正な道徳の成長を妨げ、健全で成熟した人間関係の発達をむしろ阻みます。必然的に個人を、特に最も傷つきやすい子供を食い物にしています。それは幼児ボルノの場合に明らかです。

ボルノの蔓延は社会全体にとつて大きな脅威となっています。社会の強さは、人間の超越的な召し出しという客観的真理に基づく道徳上の義務を、どこまで尊重することができるとよって決ります。ある社会が「自由のための自由」を称え、真理の命じることにより、貸さないなら、人間の本来の自由、内なる精神の自由をはなはだしく制限する結果になるでしょう。自由がひとたび道徳上の基盤から切り離されたら最後、たちまち放縦と化してしまいます。性の商品化が進む多くの西欧社会では、このような混乱状態の影響が不幸にもあらわとなっています。ボルノ類の製作は一大産業となり、その普及は時に法になつた言論の自由のあらわれであると思なされていきますが、それは個人、特に女性をおとしめること必定なのです。しかし、問題は発展途上国においても同じく深刻であると思われまます。そこでは膨張するボルノ産業が問題となつていますが、それはボルノが、社会の十全な発達に必要な道徳基盤を弱めてしまうからです。



バチカンでの皆さんの会議が、家庭評議会と共同して行われたのは喜ばしいことです。

ボルノと、子供たちに及ぼすその悪影響のために、真つ先に苦しむのはいつでも家族です。従つて社会の第一の細胞である家族こそが、この悪に対する戦いの陣頭に立たなければなりません。ボルノという悪疫と戦う皆さんの

の努力が、若者の良心を形成し、性への畏敬と慎みや貞潔の徳を正しく評価することを教えるべき家族の困難で微妙な役割を、助けるものとなりますように。皆さんの仕事はボルノによつて引き起された道徳上の重大問題に世間の関心を向けさせ、公共善に対して責任を持つ当局者の断固たる介入が必要であることを示すであろうと

十字架上のいけにえとミサ聖祭

皆さんの集まりは、今日の大きな社会悪の一つに取り組みため一堂に会する宗教者たちのすぐれた模範となります。「神

に創られた人間の尊厳に関する私たちの共通の確信を、一致して証する」(新しい課題 六〇番)ことにより、諸宗教の信者たちが、今も将来も、真のヒューマニズムの原則に基づく「愛の文明」のため大いに貢献されることを信じて疑いません。皆さんの尊い努力を励まし、皆さんの上に全能の神の豊かな祝福を祈ります。

私たちは至聖三位一体の神、すなわち父と子と聖霊の名によつて洗礼を受けました。その御名における祈りのうちに、今日も一堂に会し、尊い聖体祭儀にあずかっています。ここに招かれ、集まつた私たちは神の民の集いであると同時に、専門の職業についている人間の共同体の一員でもあります。

秘跡の力で聖体を受けるにふさわしい者とされたことを、いつも心に留めておくべきです。

初めからずっと、神はこのようにしてくださいます。太祖父たち、モーゼ、預言者たちの時代から、そしてとりわけイエズスと使徒たちの時に。

皆さん方全員はこの別荘で働いておられるわけで、私はこの機会に皆さんにご挨拶を送ると共に、毎年の皆さんのここでの仕事に感謝致します。

洗礼の秘跡は原罪を取り除いてくれますが、キリスト信者となつた最初の恩寵である洗礼の後で、私たちは罪を犯し、そして自分たちが洗礼を受けた罪人、キリストにおける兄弟姉妹であり、同時に罪人であることを悟ります。聖体は最も尊い秘跡です。私たちは罪を告白したいと思ひます。至聖三位一体の御名において私たちは信じる者たちの集いとなるよう招かれています。これは何らかのかたちで価値あるものとなるための最も効果的な道です。(…)

教会も同じです。神の言葉について考へるとは、預言者たちと使徒たち、イエズスの言葉に立ち返ることであつて、神の言葉をただ表面的に聞くことではありません。御言葉に心を開くことなのです。私たちは大地のように、神の言葉を受け入れなければなりません。

洗礼によつて、キリストにおいてすでに兄弟姉妹となつたのですから、それぞれの生活の中でも私たちは兄弟姉妹です。これは私たちが聖体を祝い、聖体にあずかるための出発点です。洗礼が私たちを一つに結び、洗礼

の秘跡の力で聖体を受けるにふさわしい者とされたことを、いつも心に留めておくべきです。

初めからずっと、神はこのようにしてくださいます。太祖父たち、モーゼ、預言者たちの時代から、そしてとりわけイエズスと使徒たちの時に。

説教・講話・書簡等の抄記

その言葉は、神ご自身が預言者、使徒、教会、そしてイエズスを通じて語ってくださいます。

「神の言葉を受け入れる」ことが聖体への参与の始まりですが、そこにとどまってはなりません。信仰の行為を伴った、さらに深い考察を続けなければなりません。

そこで今度は聖体の本質について考えてみましょう。聖体は神の「みことば」ですが、それ以上に「みことばの後に続いてくるもの」です。みことばは人となりました。神はご自分のしもべ、御子を通してお話しになります。このみことばは御子です。御子はご自分の言葉を使って私たちに語りかけます。

四つの福音書は御子のこの言葉を書きとどめ、使徒たちはその言葉について話しましたが、イエズスはまず何よりも、自らの犠牲という形で私たちに語りかけておられます。イエズスは自分を捧げることによって、私たちに話しになるのです。ご自身を与えるこの捧げものは決して絶えることがありません。御子はそれが永遠に留まることをお望みになりました。

キリストが十字架上で血を流される前夜、最後の晩餐の席で十二人の弟子に語られたことはよく知られています。この聖体祭儀、典礼の集いで私たちは主がなさったとおり、言われたとおりに繰り返して、ご自分を御体と御血と共に捧げました。私たちは、この賜を秘跡的な方法で、主ご自身がお定め

なった同じ方法で繰り返さなければなりません。これは、私たちにとっては想像もつかないようなこととです。すべての司祭たちにとっても同じです。司祭が、キリストの仰せになった奉獻の言葉、高間と十字架の上で成しとげられた奉獻の言葉を宣言し、繰り返すとき、それは途方もなく重要なことをしていることとなります。

高間は秘跡の場であり、十字架は主が取り消しのきかない方法で、一度にすべてを成しとげられた犠牲の場です。犠牲は秘跡として繰り返され、絶えることなく永久に続きますが、それは主の御旨によってのみ繰り返されます。秘跡にあらずかる準備として私たち一人ひとり、奉獻にふさわしい精神をととのえます。私たちは典礼行為を通じて人間からの贈り物のしるし、つまりパンとぶどう酒を奉獻するのです。私たちは労働の美りをパンとぶどう酒の形で、祈りつつ御父のもとへと運びます。同時に私たちは、それぞれの心の中の個人的な捧げものを全てたずさえて行きます。皆さんの奉獻に、このように個人的で心のこもった要素の欠けることがありますように。

これらのことを、皆さんの心の奥底で、存在の深みで、どうか大切にしてください。私たちが向かう所は、他にはないのです。ここで、今いるところのみ、自分の存在を向けることができ、またそうしなければなりません。イエズス・キリストのみが、そして御子を通

じて父なる神のみが、私たちの奉獻を受け入れてくださいます。こうして奉獻の行為によって、私たちは犠牲と全実体変化の準備をします。キリストがお捧げになった唯一のいけにえ、あらゆる時代の全ての人のために残された犠牲に参加する準備をするのです。この犠牲によって私たちは、創られ、洗礼を受け、贖われ、聖別されて、完全な教会、神の民の集いとなります。

イエズスは私たちの牧者です。本日の聖書朗読は唯一の牧者と他の牧者についてですが、イエズスは私たちのただ一人の、かけがえない牧者であるのみならず、私たち自身を牧者としてお呼びになります。司教たちを教会の位階制の中で牧者、使徒の後継者としてお召しになるだけでなく、司祭たちを司教の協力者としてお呼びになります。私たち全員、家庭の親、労働者、牢にいる人、知識人をはじめ全ての人が、牧者としてのお召しを受けています。職業こそ異なるれキリスト教信仰という点ではみな同じだからです。私たちの職業は「キリスト信者」であることです。私たちは善と恩寵、そして自分自身と他人と、また他人のために自分自身の、内的な救いを求めなければなりません。

もう少しこのテーマについて考えてみましょう。信仰宣言を唱えつつ、ご聖体がお与えになった秘義の深みへと入っていきます。(祝福を与える前に、最後の考察

をされた。)

私たちは感謝を捧げます。宇宙的・普遍的な感謝を捧げる義務がありますが、尊い聖体拝領の後は、個人的な感謝をお捧げします。人として、また神としてのキリストの御体と御血に、子として、また最高のかたちであずかるものとなつたからです。

感謝の雰囲気の中に、ただただいた賜、主の死と復活の賜、何物にも勝る賜を心に抱き、聖体祭儀を終りましょう。聖体は御父と御子と聖霊の神的一致というはかり知れない恵みを伴って、私たちの日々の生活の中に入つてこられ

ます。)

す。御父と御子と聖霊の御名において集められた私たちは、ミサを終えて、自分たちの使命に着手したいと思います。ラテン語のイテ・ミサ・エスト(ミサ聖祭を終ります。行きますように...)は美しい締めくくりです。このようにして、キリストの秘義への私たちの参与が始まります。

皆さんにお願いいたします。秘跡としての聖体拝領を通して、使命を果してください。

(九一・七・二一、カステル・ガンドルフオの早朝ミサで、教皇別荘の従業員と家族たちに向けてのお話)

によって、自分の教会を始めた。この国は、キリストの言葉と行いと現存によって人々の前に現れる。」(教令憲章、五番) この点に関し、今回は、イエズスが神の国についてたどってお教えになったこと、特にその意義と重要な価値について、もう少し考察しましょう。

教会はたとえで

啓示されている

教会シリーズ ④

1 福音書は、教会との関連において、神の国についてイエズスの教えを記録しています。また、この教えを使徒たちがどのようにに伝え、初代教会でそれがどう理解され、信じられたかも記録しています。神の国としての教会の秘義が、これらのテキストに啓示されているのです。第二バチカン公会議はこう言っています。「聖なる教会の秘義は、その設立において示されている。主イエズスは...よきおとずれ、すなわち、世々の昔から聖書の中で約束されていた神の国の到来を述べ伝えること

す。御父と御子と聖霊の御名において集められた私たちは、ミサを終えて、自分たちの使命に着手したいと思います。ラテン語のイテ・ミサ・エスト(ミサ聖祭を終ります。行きますように...)は美しい締めくくりです。このようにして、キリストの秘義への私たちの参与が始まります。

皆さんにお願いいたします。秘跡としての聖体拝領を通して、使命を果してください。

(九一・七・二一、カステル・ガンドルフオの早朝ミサで、教皇別荘の従業員と家族たちに向けてのお話)

によって、自分の教会を始めた。この国は、キリストの言葉と行いと現存によって人々の前に現れる。」(教令憲章、五番) この点に関し、今回は、イエズスが神の国についてたどってお教えになったこと、特にその意義と重要な価値について、もう少し考察しましょう。

2 「天の国は、自分の子のために婚宴を催す王のようである。」(マテオ二二・二) 婚宴のたとえは神の国が王の、従って最高の権威者である神御自身による事業であることを示しています。このたとえは愛のテーマ、正確に

をされた。)

不変の教え

は夫婦愛のテーマを含んでいます。つまり、父が婚宴を準備してやっただ子は花婿です。状況から彼の臨席がわかり、彼が誰であるかが理解できるようになっていきます。このことは、新約の他の部分でも明瞭に示され、教会が花嫁とされています。(ヨハネ三・二九、黙示録二・九、二コリント十一・二、エフェソ五・二三、二七、二九)

3 このたとえでは、誰が花婿なのかということをはっきりと示しています。それはキリストで、御父が人類と結ばれる新しい契約を確立される方です。これは愛の契約であり、神の国自体は、御子が御父の意志によって創設される霊的な交わり(愛の共同体)と表現されています。「宴」はこの霊的交わりの表象です。福音で述べられる救済の計画の文脈から、この婚宴に聖体秘義への言及があることを理解するのは難しいことではありません。つまり新しい永遠の契約の秘跡、教会におけるキリストと人類との婚姻の秘跡が、それにあたります。

4 このたとえで、教会は花嫁と呼ばれてはいませんが、文脈のあちこちで、神の国としての教会について、福音が語られてくることを思い出させます。このように神のご招待は普遍的で、「王は下男たちに『あなたたちは出会う人をみな宴会に招いて来るように』と命じた。」「マテオ二・九」御子の婚宴に招待客として最初に招かれた人々のうちで、欠席した者もいました。これは旧約の伝統によって賓客たるべき人々でしたが、いろいろの口実を設けて、新約の宴に行くことを拒んだのです。そこでイエズスは、家の主人である王にこう言わせています。「実に、招かれる人は多いが、選ばれる人は少ない。」「マテオ二二・十四」彼らの代りに大勢の人が招かれ、宴会場はいっぱいになりました。この話はもう一つのたとえで、イエズスが警告しておられることを思い出させます。「私は言う、多くの人が東、西から来て、アブラハム、イサク、ヤコブとともに天の国の宴席に入るが、国の子らは外の闇に投げ出されるだろう。」「マテオ八・一二」ここで招待がどのようにして普遍的になったかがはっきりわかります。神は御子による新しい契約を、選ばれた民だけではなく、人類全体とも同様に結ぼうと考えておられるのです。

5 このたとえの次の部分には、重大な条件を満たすべきであることを示しています。教会に入るだけでは、永遠の救いを保証するのに十分ではありません。「友よ、あなたはどのようにして礼服をつけずにここに入ったのですか?」(マテオ二二・十二)と、王は客の一人に尋ねます。このたとえはこの箇所、イスラエルの民の選びへの歴史的拒否から、招かれた者の個人的な行動と彼に対して下される審判へとすりかわっているように思えますが、この「礼服」についての正確な意味は与えられていません。しかし、キリストの教えの全体を見れば、説明はつくといえます。福音、特に山上の説教は、「あなたたちの天の父が完全であるように、あなたたちも完全な者になれ」(マテオ五・四八)と、天の父を模範として、神的生活と完徳の原理である愛の掟について語ります。それは「新しい掟」の問題で、イエズスが教えられるように「私があなたたちを愛したように、あなたたちも互いに愛しあえ」(ヨハネ十三・三四)ということなのです。ですから婚宴に参加するための条件としての「礼服」は、まさにこの愛であると結論してもよさそうです。

6 もう一つの重要なたとえがこの事実を確認しますが、それは最後の審判に関わっており、従って週末論的な性質があります。隣人に対する精神的・身体的な憐れみのわざで愛の掟を実行する人たちが、神の国の婚宴に参加することができるとです。「私の父に祝せられた者よ、来て、世の始めからあなたたちのために準備されていた国を受けよ。」「マテオ二五・三四」

さらにもう一つのたとえは、教会に入るのに遅すぎるということではないことを教えてくれます。神の招きは、生涯の最後の時にもあります。これは、有名なぶどう畑で働く人のたとえで明らかです。「天の国は、ぶどう畑で働く人を雇おうと朝早く出かける主人のようである。」「マテオ二〇・一」主人はその後、最後の時刻まで、何度も異なる時間に出ていきました。そして、めいめいの働き人に賃金を支払いましたが、それは厳密に正当な限度を越えて、この主人が寛大な愛を示したかったからです。

7 この点で思い出し、心動かされるエピソードは、福音史家ルカの語るゴルゴタでの話です。イエズスのとなりで十字架につけられた盗賊が、息絶え絶えに「イエズス、あなたが王位を受けて帰られるとき、私を思い出してください」と願ったとき、神の憐れみはその盗賊を招かれたのでした。そして彼は、十字架の死を宣告された贖い主にして花婿なる御方の口から、こう聞いたのです。「まことに私は言う。今日あなたは、私とともに天国にいるであろう。」「ルカ二三・四二、四三」

8 イエズスのもう一つのたとえを引用しましょう。「天の国は、畑に隠されている宝のようである。宝を見いだす人は、それを隠して大喜びで去り、持ち物を全部売ってその畑を買う。」「マテオ一三・四四」同じく、美しい真珠を求める商人がいます。「価の高い真珠一個を見つけたら、持ち物を全部売りに行き、それを買ってしまおう。」「同十二・四五」このたとえは、招かれた人々に一つの大変な真理を教えています。王家の婚宴への招待にあずかる資格のある人は、提供されるものが最高のものであることがわかっていなければならないと、まさか価値のある天の国を得るためには、喜んで全てを犠牲にしなければなりません。地上のいかなる善も、天の国とは比べ物になりません。花婿キリストの宴に参加するためには、全てを投げ出しても損失を蒙ったことにはならないのです。イエズスは、いろいろな徳目の中でも離脱と清貧が肝要な条件であることをお示しになり、「心の貧しい人」、「柔和な人」、「正義のために迫害される人」は幸せである、「天の国は彼らのものである」とお教えになりました。(マテオ五・三、十参照) また、一人の子供を「天の国でいちばん偉い人である」と仰せになりました。「あなたたちが悔い改めて子供のようにならないなら、天の国には入れぬ。だれでもこの子供のようにはりくだる人が、天の国でいちばん偉い人である。」「マテオ一八・二三、二四」

8 第二バチカン公会議の導く結論はこうなります。「神の国は、キリストの言葉と行いによって、特にたとえによる教えによって「人々の前に現れる。」「(教会憲章五番) 神の国の到来を説いて、キリストは御自分の教会を創設され、教会の内的な、神聖な秘義が何であるかをお示しになりました。(教会憲章五番参照)

「教皇様の声」ヨハネ・パウロ二世教皇の説教、書簡、講話等を解説なしにそのまま伝える月刊紙 毎月十日発行 定価 一部八十円 送料実費 一年予約九百円 送料六百元 二十部以上の一括購入な

郵便振替 神戸 3-72393